

日照雨過ぎ島に匂へる葛の花  
虫の音のコップあふるるやうにかな  
曙は海より来たり注連飾

山田真砂年

「垂穂集」より

【稻】 一月創刊号

昭和五十九年、鍵和田柚子が創刊した「未来図」が本年一月に終刊。その終刊を受けて「稻」準備号を経て、創刊の運びとなつた。隔月刊である。主宰山田真砂年、現段階では同人会長、編集長は決まつていらない。

山田主宰は「『未来図』の終刊により自然発生的に集まつた皆様と『未来図』以外から参加いたいた皆様により『稻俳句会』が立ち上りました」と卷頭で述べている。「氣取らず、背のびをせず、自分の言葉で自分の詩を詠むこと」をモットーとする。

目次の次頁から六頁にわたつて伊藤トキノ、星野高士ら六名の著名俳人による「祝句」が三句づつ掲載され、次頁に主宰の「第一声」十二句。同人等の作品として「垂穂集」「瑞穂集」「稻穂集」が続き、選評、エッセイ、吟行録等バランス良く編集されている。

主宰作品「第一声」より

名月や切絵のやうな闇に泛く  
馳せ参ず真つ直ぐな先稻穂波  
胡桃落つ夜は思慮深き髪の先  
書き込みの多き歳時記冬隣り

「瑞穂集」より

今村博子  
岩本尚子  
北原昭子  
直木格子

あのころの揺れて一詩のまとまりぬ

西井久美子

寒卵火種のごとく手のひらに

伊藤翠

石垣は大木戸の跡虫すだく

牧園賀

相撲草腰を落として引き抜けり

大坪正美

新玉の光り集めて「稻」創刊

沼田布美

「稻穂集」より

岡本秀子

キヤツチヤーミットの凹み真つ黒夏の果

高原貞夫

結ひあげし髪に稻穂や初詣

飛田小馬々

不揃ひの取れ立て野菜涼新た

瀧本崩

雨粒の波紋の中のあめんばう

上田信隆

電線のだらりと撓む豊の秋

「稻」という結社名は、「日本文化の源流を辿れば、稻作に行き当たることから、稻作が日本人のものと考え方、見方の基調となつてゐる」ためだとしている。本「創刊号」を起点として「稻」俳句会が大きく羽撃かれることを願つて止まない。